

第 72 回市町村対抗「かながわ駅伝」競走大会の展望

(資料提供：神奈川県陸上競技協会)

※帰省地参加資格・・・現在の居住地以外の市町村から出場できる制度。
その場合、県内中学校・高等学校卒業時の居住地町村に限る。

- ・横浜市の 3 連覇か、相模原市が久々の勝利を収めるかが楽しみである。
- ・昨年優勝の横浜市は大幅な若返りをし、新生のチームパワーで連覇に挑む。この大会ではベテランの部類に入る稲毛（プレス工業）、宮尾（専修大）を軸に、全国男子駅伝で好走した谷澤（金沢高）、児玉（鎌倉学園高）、佐久間（國學院久我山高）らのスピードのある高校生をからめている。女子区間には、リンズィー（金沢高）が控え、若い高校生が気後れしなければ 3 連覇は可能である。
- ・昨年準優勝の相模原市は、久々に優勝を狙える力がある。箱根駅伝 5 区で好走した小町（日本体育大）を柱に、ふるさと選手の高谷（JR 東日本）、加藤（東京農大）と 3 本柱が揃い、若い藤沢翔陵高の 3 人トリオも 14 分台で走っており、横浜と対等に戦える力がある。6 区の真名倉坂を担う走者の出来如何が勝敗の鍵を握るだろう。女子区間の西山も好調であればリンズィーと対等以上の走りも可能である。
- ・3 位争いは、川崎市、横須賀市、藤沢市だろう。
- ・横須賀市は、秋澤（神奈川大）、滋野（星槎道都大）、内田（法政二高）、佐藤（専修大）の 4 名は 14 分台前半の走力は横浜市・相模原市以上の力を秘めている。あと 1 人と女子区間で上記 2 チームと若干の差が出てくるだろう。上位 2 チームが崩れれば初優勝も可能である。
- ・川崎市は、橋本（順天堂大）の出来に大きく左右されそうである。高校生 2 名も若く、一抹の不安材料もあり、大学生も一般社会人を含め走力が安定していない点が見られる。
- ・藤沢市は、本年もプレス工業 3 名の選手がどのくらい走れるかにかかっている。若い大学生や高校生も力があるので、2、6、7 区にプレス工業の 3 人がしっかり締めてくれば 3 位入賞も見えてくるだろう。
- ・町村の部は、愛川町の 2 連覇が濃厚で二宮町が追いかけるだろう。
- ・愛川町は昨年最終 7 区で大逆転の優勝を飾り、本年は 2 連覇に挑む。大エース荻田（拓殖大）を中心に、吉川（山梨学院大）、中武泰雅（駿河台大）、中武泰希（向上高）兄弟を加え上り調子の選手を擁し、前半区間をうまくまとめることができれば、6、7 区で昨年同様の逆転が可能である。
- ・昨年、最終 7 区ラスト 2 km 弱で愛川町にかわされた二宮町だが、本年は捲土重来を期している。大学生になった兄・小坂太我（日本大）と弟・友我（藤沢翔陵高）、さらに小早川（藤沢翔陵高）を中心に、決して強くはないが他の高校生・一般人も安定しており、つなぐ駅伝ができる。
- ・大磯町は大エースの大川（神奈川大、昨年 6 区区間賞）を擁し、松村（専修大）、平原（平塚市役所）らがしっかり走れば町村の部 3 位は堅いだろう。
- ・葉山町もベテラン川村（プレス工業）を中心に、若い高校生も元気であり（塚田・安達が高校駅伝でそれなりの成績で走っている）3 位争いに食い込みそうである。

各区間の見どころについて

1区 (3.0km)

中学生が担うこの区間は、昨年から競技場内がスタートとなり、2年前までと比べ最初からスピードを競うようになった。本年も、全国都道府県対抗駅伝に出場した安倍（厚木）・安澤（逗子）を中心に昨年の区間記録に挑戦をする積極的な走りに期待したい。

2区 (9.7km)

駅伝の流れを決める重要区間。前半に約1.7kmの軽い上り坂があるものの、後半5.5km過ぎからは、2.5kmの下り坂を思い切り駆け下り、各チームともエース級の投入により目まぐるしい順位変動がみられ、また豪快なゴボウ抜きも見られる区間でもある。スピードのある滋野（横須賀）・高谷（相模原）らが秒差の区間賞争いを展開しそうである。

3区 (8.2km)

ほぼ平坦で走り易いこの区間は、スピードのある選手が多く、若い高校生や新人を投入するチームも多い。横浜市は谷澤、相模原市は高橋、横須賀市は内田辺りを投入し、後続を引き離しにかかるだろう。特に6.5kmからの残り1.7kmは、向かい風が急に強くなることも多く、ラストの踏ん張りが大切である。

4区 (2.7km)

女子が担当する区間で、2.7kmと短い距離ではあるがタイムの上では1～2分と差が大きく、男子以上に重要性が増しているともいえる。

この区間では、吉村（茅ヶ崎）が区間賞獲得の第一候補で、対抗は横浜市のリンズィー、相模原市の西山であろう。町村対抗の部でも柏木（松田）は県高等学校駅伝の1区で2位、関東高等学校駅伝1区で8位と好走しており、大きく順位を引き上げるだろう。

5区 (7.2km)

男子が担う区間では最短の7.2kmであるが、勾配が急な坂ではないものの、ほぼずっと上り坂が続く。キック力の強い高校生は果敢に挑戦してほしい。そういった傾向のあるこの区間に、力のある横浜市・相模原市・横須賀市など優勝を狙うチームは意外性のある選手を投入してくることもある。

6区 (10.7km)

この駅伝最長区間で、且つアップダウンの大きなコースは、各チームともエースを投入してくる。ここの区間の成否が、過去にも優勝の行方に大きく影響してきた。特に6km過ぎから1.5km続く真名倉坂の急坂は選手を悩ませる。昨年区間賞を獲った大川（大磯）や、史上初めて高校生で区間賞を獲った橋本（川崎）を中心に稲毛（横浜）・小町（相模原）・秋澤（横須賀）がからんだ区間賞争いの激走も見ものである。兎にも角にも、本県各市町のエースが集うつば競り合いが見ごたえあるだろう。

7区 (10.0km)

2区とほぼ同じ距離ではあるが、コース全体としてみるとゴールに向かって下り勾配が多く、走り易い区間である。しかし、前半の4kmの下り坂をあまり突っ込みすぎると、7.5kmまでのダラダラ上りや、ラスト2kmの平坦が走れなくなってしまうので要注意である。

横浜市は昨年同様に宮尾でキッチリと首位をキープする作戦か。追う相模原市は、加藤で逆転を狙ってくるだろう。横須賀市は佐藤辺りか。昨年の町村の部では、愛川町が6・7区の好走で大逆転したように、荻田（拓殖大）、吉川（山梨学院大）の2人で今年も層の薄い他市を急追しそうだ。